

春燈東京句会報

令和六年 二月十一日 (第三四三号)
会場・主婦会館プラザエフ3F
参加者 52名

鈴木直充主宰作品

老眼鏡ねんごろに拭き雛納

わが心音正しく山椒芽吹きけり

啓蟄や生きとし生けるものに雨

主宰特選10句と講評

春雷やするりと抜くるしつけ糸

小山 繁子

裁縫の本縫いのためにかけたしつけ糸。仕上げの前に抜こうとしたら折しも春の雷が鳴って、しつけ糸がするりと抜けたという。家族の衣類の縫物であるうか。夏の雷と違い、春の雷には何かしら温もりが感じられる。

轉に竹箒立てて耳を立て

小山 繁子

庭の掃除をしている時に鳥の轉りが聞こえた。思わず使っていた竹箒を立てかけ、轉りに聞き耳を立てた。「立て」「立て」のリフレインの効果により心の耳を立てている様子が感じられ、すっきりとした句に仕上がった。

雄心へ菜の花明り西行忌

小林 文良

「雄心」は作者自身の心映えでもあり、西行忌にもかかるもの。西行は高貴な位階の武士の身分を捨てて仏門に入り、全国を行脚しながら和歌を詠んだ人。中七の「菜の花明り」は西行の雅の心と解することができる。

あはあはと閏日暮るる春障子

栗原 完爾

閏日は四年に一度来る「二月二十九日」である。春障子に囲まれて寛ぐ閏日ははかなく暮れていくように、我が人生もいよいよ暮れてゆくかと詠んだ抒情句である。「あはあは」と「暮るる」のリズムに老いの艶がある。

春風邪の兄に折鶴教へけり

大平さゆり

妹が、春の風邪をひいて元気がない兄を慰めてあげようと、鶴の折り方を教えている。「春風邪」の季語と「折鶴」の取り合わせから、小さい兄妹の気持の通い合いが感じ取れる。読み手の気持を優しくしてくれる作品である。

雲雀東風林の中の無言館

小倉 陶女

無言館の正式名称は「戦没画学生慰霊美術館」である。林の中に要らざる装飾を省いた無言館がひっそり建っている。雲雀が佳き声で鳴く日、無言館へ東風が吹いている。雲雀東風が亡き画学生達を鎮魂しているようである。

彼岸西風昨日のきのふ遠きかな

三宅 文子

「昨日のきのふ」則ち昨日も一昨日もたちまち過ぎたと詠んだ。「彼岸西風」の季語から亡き方に思いを重ねているのが読み取れる。久保田万太郎先生の句(うららかにきのふはとほきむかしかな)をオマージュした作品。

竹の秋雀こぼれてみせにけり

三上 程子

「竹に雀、梅に鶯」は凡俗過ぎて、句にしてはいけなと言われる。けれども、作者はその「俗」を逆手に取る。「こぼれてみせにけり」と曲をつけ、諧謔に富んだ詠み方をしたことにより、超俗の俳諧に仕上がったのである。

治響酒や見えぬものほど恐ろしき

小泉 三枝

治響酒は、立春から五日目の社日に飲むと響が治ると伝えられる。作者は、響は治ったが見えないものも又恐ろしいと詠んだ。聴覚に関わる珍しい季語「治響酒」を用い、「見えぬものほど恐ろしき」と視覚にまで及んだ諧謔句。

真砂女忌や夕風さやの酒林

松橋 利雄

酒林は杉玉とも言い、造り酒屋が軒にかけておく。真砂女忌の三月十四日に夕風が吹き、酒林を揺らしている。「さやの」のフレーズが小料理屋「卯波」で客を迎える鈴木真砂女さんのさっぱりした気性に通じる。